

基調講演

ロータリー100周年に寄せて

天野 肇

先ほど原ガバナーから大変ご懇篤なご紹介をいただきまして、2710地区のバスターガバナーの天野でございます。

私は、皆様方の2690地区の田村様と同期のガバナーでありまして、1996年、97年度務めさせていただきました。皆様の地区には素晴らしいバスターガバナーがいらっしゃいますのに、他地区の私を選んでいただきまして、本当に光栄であり感謝をいたしております。

昨日、RIの会長代理であります松本様ご夫妻と一緒に福山からこの地に参りました。初めて車で会長代理と同行させていただき、随行するという昔の幹事役を思い出してしまいました。

途中で何回かミスをしましたけれども、RI会長代理の松本様はこの地区のことを369地区時代からよくご存知でありますので、まるで私のナビゲーターのような役を果たしていただき無事到着をし、原ガバナーにお会いいたしまして、昨日は素晴らしいお食事を頂戴いたしまして、今日は何か感謝の意を表さなければならないということで、ロータリーの100周年に寄せてというお話をさせていただきます。

皆様のお手元に私なりに作りましたレジュメをお渡しをしておりますが、このレジュメの中、相当割愛をして話をさせていただきます。ご容赦をお願いいたします。

今年度、「CELEBRATE ROTARY」ということで、100周年を迎えるわけですが、原ガバナーのように本当に人生の大半をロータリーに捧げられた方から見ると、私はまだロータリーに入りまして今年で27年目です。ロータリーの100年を語るということはなかなか辛いところがあります。『講釈師が見てきたような嘘を言い』と言いますが、そんな感じで、私が考えるところは文献を見てその感じを皆様にお話をするという以外には手はありません。そういうことで、今まで私なりに勉強してきましたこと、この場で皆様に3つのパ



ートに分けてお話をさせていただきます。

1つはロータリーの誕生とロータリーの精神の確立とその時代背景がどうであったかということ。2つめはロータリーの100年の基礎を築いた人間等ということ。ロータリーの歴史を見てみますと、素晴らしいロータリアンを輩出しております。後ほど申し上げますけれども、その人たちは本当に人間臭いロータリーの歴史だと思っております。その中で今日は二人だけ取り上げてお話をしようと思っております。それから3番目が、明日にけるロータリーと大変厚かましい偉そうなことを書いておりますが、ここのところだけは私の独断と偏見ということでお許しをいただきたいと思っております。

ロータリーの誕生といいますが、いろいろ文献があるわけですが、私が気に入って読んでおりますのは、シカゴロータリークラブの会員であったオーレン・アーノルドさんという方がおられます。この方は「Golden Strand」というシカゴロータリークラブの歴史を60年にわたって書かれた方でありまして、ちょうど私と同期で神戸のご出身の田中毅バスターガバナーが翻訳をされまして、それを読みシカゴロータリーがやはりロータリーを作ってきた

んだなという感じを受けました。

ご承知のようにロータリーは1905年の2月23日にできております。その出来た当夜のことはもう皆様、頭に描かれる方も大変多いのではと思いますが、ロータリーをやっぱり好きになるためには、あの1905年の夜に出来たロータリー物語を自分で言えるぐらいになるロータリアンであってほしい、私もそうありたいと思っているわけでありまして。往年アーノルドさんは何か芝居的一幕ものように書かれております。そのことをちょっと触れさせていただきたいと思っております。

実は、シカゴで生まれたロータリー、2月23日というのはガバナーやガバナーエレクト、パストガバナーもみんなご経験だと思っておりますけれども、非常に寒い時期であります。体感温度が恐らく私の身体でマイナス10度ぐらいはあったであろうし、当時はエネルギーの消費量も大変少なかった時代でありますから、私が感じたよりもっと寒い時期に、4人の方はそれに負けないぐらいの情熱でロータリーを作ったわけでありまして。

オーレン・アーノルドの「Golden Strand」を見てみますと、その前の晩に、前の日にシルベスタ・シール、ポール・ハリスの生涯の親友になりましたけれども、話をちゃんとしているわけです。そのときは名前はロータリーではなかったわけですが、自分が考えた新しいクラブについてシールに話をしたわけでありまして。シールはそのことに賛成をして、マダム・ガリの店に行きました。当時は素晴らしい夕食、食事を食べさす店であったようです。私が探して行きました時は、もちろんその店もございませんでしたけれども、マダム・ガリの店を出てからノース・ディアボーン街のそのガスターバス・ロアの事務所へ行くまでを地図でちょっとたどってみました。数ブロックですから歩いていったわけですが、その歩く間、非常に寒い中で彼らはやっぱりロータリーのことを考え、その情熱が寒さを忘れさせたんだなと、これは私なりの想像でありますけれども、そういうところから見ても素晴らしいロータリーの誕生だなど、厳しい気候をものともせずロータリーを作った、そしてガスターバス・ロアの事務所は小さい事務所、これは、ワンロータリーセンターの中に711号室として保管をされておりますが、本当に狭い部屋なんです。ガスターバス・ロアはその後にいろんな苦勞をして結局不幸な事故で亡くなるわけでありましてけれども、

その事務所の中で4人は肩を寄せ合うようにして座ってロータリーの話をしたわけでありまして。どうい話をしたか、これはポール・ハリスがこのように話したと書いてあります。

「私は、実業家のクラブについてずっと考えてきたんだ、それはシカゴの今まである社交団体とはまったく違う新しい種類のものなんだ」と。みんなは「それはどんなんだ、どんなクラブなんだ、どんな意味を持つんだ。」「そうだね、知己と友情を十分に強調したい、しかしそれだけではないんです。会員同士がお互いのビジネスを伸ばす、そういうことが出来たらいいな。これはもう難しいはずがない。みんな分かるだろう。」とポールは続けたわけでありまして。「例えば、二人の会員が同じ職業を持つことが出来ない、それを決めたらどうだろう。そうすればクラブの中に無駄な、あるいは非常に困難な競争をするということがなくなる、そういう相手がなくなる。しかし、もし会員の誰かが品物やサービスが欲しいときはクラブ内の人が進んでその人にサービスや品物を提供できる、そういうクラブはどうなんだ。」と持ち掛けたわけでありまして。これは相互扶助の一種ということでありまして、これをまとめてみますと、知己と友情と相互啓発、お互いに経営者として、専門職業人として話し合いながらいろんな啓発をしていく、そこのところが一点素晴らしいことだと思っております。そして、1業種1人とポール・ハリスは言ったわけでありまして。

最後がこれが問題になったわけですが、お互いに商売の取引をしようではないか、これが互恵取引であります。ところがポール・ハリスが思っていたのは少し逆の方向へロータリーは行ってしまったわけですね。その内に互恵取引が出来るなら、俺も私もロータリーに入りたいと、ロータリーの中で取引の証明書なるものが出来てしまいました。そこが最初のロータリーの出発点であったわけですが、考えてみましたら、ロータリーはそういうことを最初に認めたがために素晴らしく拡大をしていったわけですね。それがなかったら恐らくシカゴのように混沌とした社会の中で「何やロータリー、たいしたことないやないか」という感じで私は受け止められたと思うのです。1業種1人の中で競争もなくて、相手にきちっとしたサービスをやれば自分の商売が繋がっていく、これがロータリーの最初のところの、スタートだったと思うのです。それが



今日のロータリーを生んできました。

現在ご承知のように166ヶ国、先ほど松本RI会長代理がおっしゃったように121万人ということになりました。本当なら130万人に増えていてもいいわけですが、後ほど触れさせていただきますが、いろんなことがあって、現在まだ120万人を少し超えた程度で留まっておりますけれども、おそらくポール・ハリスもそれを作った他の3人も予測は出来なかったと私は思います。それぐらい素晴らしい成長をしてきたというところにロータリーの面白さがあるかなというように思います。

それでは当時はどうい世相であったかといえますと、歴史に詳しい方はよくご承知のとおりであります。1905年といえますと、わが国はロシアと戦い、ポーツマス条約をアメリカの大統領の仲介で締結しました。ということは、あの時代帝国主義の勃興期、華やかな時代、植民地政策が行われていた時代でありますから、ナショナリズムの大変激しい時代にロータリーは出来ております。同時に民族主義の台頭がありました。1905年も少し経ち、1914年の第一次大戦の原因を作る民族主義運動が出てきた時代であります。ところがアメリカというのはそういう時代にありながら、すでに資本主義国家として世界に冠たるものになりつつあったわけですね。当時の歴史を紐解いてみますとアメリカは資本主義の実験室だというふうに書かれております。素晴らしい力のある若々しい国としてアメリカが成長してきていたわけですね。そういう中でロータリーが出来た。ある意味ではこれは偏見でありますけれども、頭の上をものすごい嵐が過ぎ

ており、シカゴも大変難しい街ではあったけれども、ロータリーということを考えるようないい環境にあったんだなと思うのです。それがバルカン半島とか日本とかあるいはヨーロッパの難しい国にロータリーが生まれたと考えることは私はできないなと。アメリカという若々しい国で、しかも資本主義の中で社会のいろいろな改革を考える国、しかもそこにキリスト教のカルビン主義とかプロテスタントのように新教的なものが底に流れている、若々しい国だからこそロータリーが誕生したんだなと。また、ポール・ハリスもそのような気持ちでロータリーを作れば何か社会改革が、社会正義が少しは行われるんじゃないかなということ考えたんだらうと、私はそのように独断と偏見であります。アメリカでなかったら今日のロータリーは生まれてなかったというような感じがいたします。それを証明するところがあるわけですが、1893年にアメリカ史上初めての恐慌がやってきています。当然歴史でご承知のように1929年ウォール街の株の大暴落、アメリカの悲劇、世界の悲劇が始まったわけでありまして、その当時からアメリカというのはいろんな社会奉仕の関係で素晴らしい活動をする国になっていました。例えばアメリカで最初に貧困救済を目的とした社会施設、これをセツルメント運動と呼ぶそうですが、この運動を展開したジェーン・アダムスは、なんとシカゴで社会福祉施設であるハルハウスというものを作ったというふうに書かれております。1900年にはイギリスではあまり大きくなかった中世軍の活動がアメリカにわたって急速に大きくなったということも書かれております。同時に1906年、ちょうどロータリーが出来た1年後にはアプトン・シンクレアという作家がシカゴの食肉工場の不衛生な状況、労働者虐待に対してもものすごい暴露記事を書いて、連日新聞をにぎわしているといった記事も歴史の中に書かれております。

そのようにアメリカというものがその当時から資本主義の中で何度となく繰り返してきていますが、社会を改革しようという動きがあり、ちょうどその頃が1900年の、20世紀の初頭だったのです。だからロータリーが生まれるには本当に適した時代だったのです。その生まれ方というものは、私が先ほど偏見で申し上げましたけれども、あまり生々しい形ではなくて、われわれ実業家や専門職業人に訴えられるような、なるほどねというところで、

例えば昼の時間、1時間でも友達と話をできれば、あるいはその友達の意見に啓発されて自分の事業に役に立つことができればなど、少しでもストレスの発散が出来る場所、そういうものをロータリーが、ポール・ハリスが提供したんだと私なりに思うわけでありませぬ。ポール・ハリスもある意味ではアメリカの資本主義社会生活の中で下支えになるような、ボトムアップ的なクラブを作ったんだと。そこがロータリーのいいところなんだという感じがいたします。いずれにしても1業種1人、実業人や専門職業人が週1回に話し、それによってストレスが発散できる、いい知恵が生まれる、同時に友情も深められる、お互いに事業発展のために相互取引を継続していく、これが初期のロータリーの発展につながったわけでありませぬ。ところがやはりそれにはいろんな意見を持つ人が出て参りました。これは1906年にすでにドナルド・カーターがロータリークラブへ勧誘をされて、もうよくご存知のことですので、結論に入りますけれども、みんなのためにならないようなクラブなんか入りたくない、何かしたほうがいいんじゃないかと言い、ポール・ハリスはそこではと気がついたわけでありませぬ。同時に自分もそれなりに考えていた方向をドナルド・カーターが提唱してくれた。これがロータリーの転換をしていくきっかけになりました。自分の職業の中でいろんな活動をしながら社会奉仕もロータリーのひとつの仕事として、奉仕として、それを受け入れていこうという動きがあったわけでありませぬ。そして1910年の第1回の全米のロータリークラブの連合大会の席上でそのことが出来上がりました。

実はその1910年の全米の連合大会の大会のところでは、互惠取引をもう一層継続しようじゃないか、全米に拡大をしよう、取引名簿を作ろうという提案までいったわけでありませぬ。そのことが逆にロータリーに危機感を抱かせることになりました。そのときに、アーサー・フレデリック・シェルドンが奉仕の理想、とにかく「最もよく奉仕するもの、最も多く報いられる」と当時その言葉で演説をしたかどうかは私も定かではありませんが、その素晴らしい演説にみんなが魅了されました。1910年がそういう意味では危機でありながら、その危機を乗り越えるロータリーの素晴らしい転換期であったと記されております。

そういうことで、その後ロータリーはいろんな記念すべきことをクリアしていきました。例えば1912年、ダールス

の国際大会ではロータリーの綱領に職業を通じて社会に奉仕しよう、これが取り入れられました。1915年のサンフランシスコでの大会では職業人のためのロータリーの倫理訓が採択されたわけでありませぬ。そして圧巻は、1923年のセントルイスの国際大会で社会奉仕に関する声明、いわゆる「決議23-34号」が採択されたわけでありませぬ。この中で、クラブが団体として行動するだけの奉仕活動より、広く個人の努力を結集する活動の方がよりロータリー精神にかなっており、そのような声明が採択され、よりよいロータリーが生まれたのです。このようにしてロータリーが実はアメリカの建国の精神であった「I will」の精神を23-34号で私は認めたと思ひませぬし、それが同時に世界のロータリアンに感銘を与えたと思ひませぬ。そのようなことで、1920年代にもうすでに私はロータリーの基本的な考え方というもの出来上がったと解釈をしています。

その後多くのロータリーはいろいろなことをしてきました。それは枝葉をつける作業であります。RI会長代理の松本様がおっしゃったように、団体奉仕ということも取り入れよう、これは枝葉をつける作業であります。同時にロータリーは剪定をする作業もやってきました。いらぬものは除いていく、いい物を残していこうと、1920年以降の活動というものそういうことに終始したんだと、私は感じています。そういうことで、職業分類に基づいて個人と職業、職業と社会のかかわりを奉仕、サービスの観点から意識付けていったということ、そして会員の親睦を活動のエネルギーにしたということ、同時に非常に重要なことであります。アメリカの非常に厳しいキリスト教的な考えの中で生まれたロータリーにして、宗教的な束縛を取り払ったということ。これはポール・ハリスの素晴らしい賢明なところであったと思ひませぬ。同時に組織としての政治への関与を断ち切ったということでありませぬ。これがロータリーが今日こうやって皆さんとともに地区大会も出来る、いろんな意味で楽しめる、そういうロータリーを作り上げた基になっているなど感じています。同時にいろんな地域の案内と、そして社会の平和を希求していったということでありませぬ。これは今日のロータリーの素晴らしい理論的な裏づけになっています。

RIは、別の項目を挙げていますけれども、中身はほとんど変わらないと思ひませぬ。RIはロータリーの「timeless



principle 変わらない原則」とこのように呼んでおります。全部を読みまして、必ずしもそれが賛成ではありませんが、私なりに解釈をして今のような形のもをロータリーの変わらない原則なんだと思ひませぬ。このように呼んでおります。

次のパートに移らせていただきますが、ロータリーの100年の基礎を築いた人間像ということで、2人の人を取り上げてお話ししたいと思います。

ロータリーの歴史を皆さん紐解いてみられれば、先ほど申し上げましたが、きわめて人間臭い歴史だと思ひませぬ。その人間臭い歴史が今回RIから出されました。この本に出ております。奉仕の一世紀ということで、著者はデビッド・C・フォアードさん、元理事さんである菅野多利雄さんが監修をされています。「国際ロータリー物語」。これを読んでいただくと本当に面白いですね。ロータリーはこういうものだったのか、こんなものなのか、ロータリーが目指すところはこういうところなんだということ、これが本当によく分かります。その中で私が、これはやっぱりロータリーを築く上で素晴らしい活躍をされた人だと思ひませぬ。2人だけ挙げてみました。その中にたくさんの方がおられるわけで、私は自分で、玉と呼んではいかんと思ひませぬ。珠玉の人々と気持ちの中で名づけているわけでありませぬ。例えばこの例会が始まる前にわれ

われはロータリーソングを歌いました。ハリ・ラグルスがみんなの気持ちを一緒にしようと、共通認識を持つてではないかということで歌を提唱しました。そのハリ・ラグルスも素晴らしい人々の中の1人だと思ひませぬし、先ほどお話ししたドナルド・カーターもそうでありませぬし、アーサー・フレデリック・シェルドンもそうでありませぬ。同時に、今日の世界的なロータリーを築き上げるための基本的な考え方というものを定義をした、第2回のRI会長のグレン・ミードもそうでありませぬし、ロータリーの善意が遍く世界に行き渡るようにしようじゃないかと、そしてRIの会長になりましたアーチ・クランプはロータリー財団を作りました。同時にロータリーを大変難しい解釈をしたわけでありませぬ。やはり日本人には非常に受ける方ですね。またガイ・ガンデカー、この方も23-34号の採択に大変尽力をされたRIの元会長であります。われわれがまた忘れてはならないのは日本にロータリーを導入し、東京ロータリークラブを1920年に作りました米山梅吉さん。今われわれが自分の事業の中で、気持ちの中にいつも入れておられると思ひませぬ。4つのテストを考案し、それが1946年でありませぬ。国際ロータリーに使用権を認められた、ハーバート・テラーの考えた4つのテスト、そのハーバート・テラー。こうした素晴らしい人たちがお

られるわけですが、あえて2人の人について触れさせていたがたいと思います。

1人は、チェスリー・ペリーであります。これはよくご存知だと思います。ロータリーのRIの事務総長として32年間ロータリーに献身をいたしました。なぜこの人のお話をするかといいますと、私はガバナーエレクトになりまして国際協議会がアナハイムで終りシカゴへ参りました。ポール・ハリスのお墓を訪ねていくわけですが、その当時は大変不勉強でありました。ハイラム・ショーレーとポール・ハリスが同じ墓地で本当に近所に埋葬されていることは思いもせませんでした。チェスリー・ペリーは仲が良かったはずだ、あの2人がマウントホープの墓地に葬られているんだらうとそう思い込んでいたわけです。行ってみますと実はハイラム・ショーレーでありました。それでなんだらうと思ったわけでありました。これだけ今のロータリーを築くために営々と努力をしたチェスリー・ペリーが同じ墓に埋葬されていない。で、この本を読んでみましたところ、実はチェスリー・ペリーは遺言で、自分の遺骨は灰にして大好きなミシガン湖に撒いてくれと言って亡くなったそうでありました。したがって彼の骨は灰にされてミシガン湖に撒かれました。だから同じ墓地でなかったのかなということにも感じるわけですが、そのようなことからチェスリー・ペリーに興味を持ちました。ロータリーの設計者はポール・ハリスである、それを作った第1級建築士はチェスリー・ペリーだといわれています。ですから、ポール・ハリスはアーキテクトであって、ビルダーはチェスリー・ペリーであるというように言われています。この2人は心が通じ合うというより考え方が一緒であったわけです。ロータリーを築く上で理論的な考え方、基本的な姿勢は一緒でありましたが、お互いに本当に冷淡なロータリアンであったとこの本に書かれております。そういうことで、チェスリー・ペリーに興味を持って読んでみたわけですが、チェスリー・ペリーがなぜポール・ハリスと一緒にロータリーを作ってきたかということに、少し触れさせていただきますと、実は1908年にチェスリー・ペリーはシカゴロータリークラブへ入会をいたしました。その時の会長はハリ・ラグルスでありました。この頃、ロータリーは急拡大をしようとしていた時期であります。西海岸にもいろんなロータリーを作ろうじゃないかと、ポール・ハリスはむしろ自分のホ

ームクラブへ出ずに急拡大、拡大のことばかり考えていた時期なんです。だんだんシカゴクラブの会員との間に溝が出来ました。ある日突然、ある会員が「急拡大をやるとロータリーは質を下げる、西海岸の拡大なんかは何の意味もない」とクラブの中で大きく叫んだわけでありました。その雰囲気や和らげようということでハリ・ラグルスは考えました。これはすばらしい人が入った、このチェスリー・ペリーをロータリーのスポークスマンに仕上げよう。ロータリーのいろんなことを世の中に知らしめていこう。ところがポール・ハリスは誤解をしたわけです。自分のやっていることの反対をするためにチェスリー・ペリーをみんなが持ち上げたんだというような誤解で、その時の感情の行き違いが最後までずっと付いていったというような理解を私はしておりますけれども、やはりチェスリー・ペリーは大変頭のいい人でありましたから、ポール・ハリスの考え方をよく理解して、理性的にポール・ハリスを助けていったわけでありました。それが彼の素晴らしいところであったと同時に、ロータリーに対して管理という考え方を導入したのは彼が初めてであります。ロータリーは今、アドミニストレーションということで非常に管理を強調しますが、当時いろんな意味で複雑に拡大しようとしたロータリーを一本にまとめるといって役割を担ったのがチェスリー・ペリーでありました。その素晴らしい彼の行動力によって、同時に一回も休まない忍耐力によってロータリーはだんだんと築かれていったわけでありました。

そのような素晴らしい人材がロータリーにあった。それがチェスリー・ペリーだらうとそう思います。

2人目に取り上げたい人は、この書物を読んでいたければお分かりと思いますが、ジェームズ・ウィラー・デビットソンという人です。ジェームズ・P・ウォルシュさんの「THE FIRST ROTARIAN」という本の中に書かれているのですが、私はこの人のことは、ガバナーにならせていただいた当時はたいして大事な人じゃないなと読み飛ばしておりました。今回初めて読みまして、こんな素晴らしい人がいたんだという印象を深めました。そのようなことでご存知の方もありませんが、ご紹介しておきたいと思っております。

当時、この人がロータリーに入った頃は第1次大戦の後遺症が多く残っていた1921年でありましたが、この

時ポール・ハリスはロータリーの綱領の中へ国際親善と平和を目的にロータリーを推進するというので、これに尽力をいたしました。そしてロータリーは国際連合から国際ロータリーという名前に改称をしたわけですが、これ以降ポール・ハリスはロータリーをヨーロッパからアジアを結ぶ線に拡大したいという願いを持ったわけでありました。これを実行したのが先ほど申し上げたジェームズ・ウィラー・デビットソンであります。この方は非常に親日家ですが、同時にそのとき2人の人が選ばれました。カーネル・J・レイトン・ラルストンという人と、ジェームズ・ウィラー・デビットソンであります。軍隊ではともに大佐で、お互いに大佐、大佐と呼ばれあっていたわけですが、このデビットソンがポール・ハリスの意を呈してヨーロッパからアジアのいたるところを、彼は2年半で24万kmを旅をすることでロータリーをカイロに作り、アテネに作り、そしてトルコのイスタンブールにも作ったわけでありました。彼と彼の奥さんと娘さん1人、3人が2年半にわたる間、世界中を旅してロータリーを説いて歩いたわけですね。その忍耐力が今日のロータリーを作ったんだなと、そのような感じがするわけです。当時の交通手段を考えますと本当に困難な旅だったらうと思っておりますし、いろんな意味で風土病がまだ流行っていた時代でありますから、家族3人はその風土病にもかかった時期もありますし、彼本人が非常に重い病気にかかりました。しかし、不撓不屈の精神で彼は最後上海にいたったわけでありました。同時に上海のクラブを説得して貴州と広東にクラブを設立して、そして無事カナダに帰ったわけですが、残念ながら体調を悪くしてしまい、帰国2年後の1933年の7月に重い病気で亡くなりました。61歳でありますから、私が今65歳なのでやっぱり若くして亡くなったんだと、惜しい人を亡くしたな、もっと生きておられてポール・ハリスのように頑張ってもらえればまた一層素晴らしいロータリーが展開できてたかなというように思います。

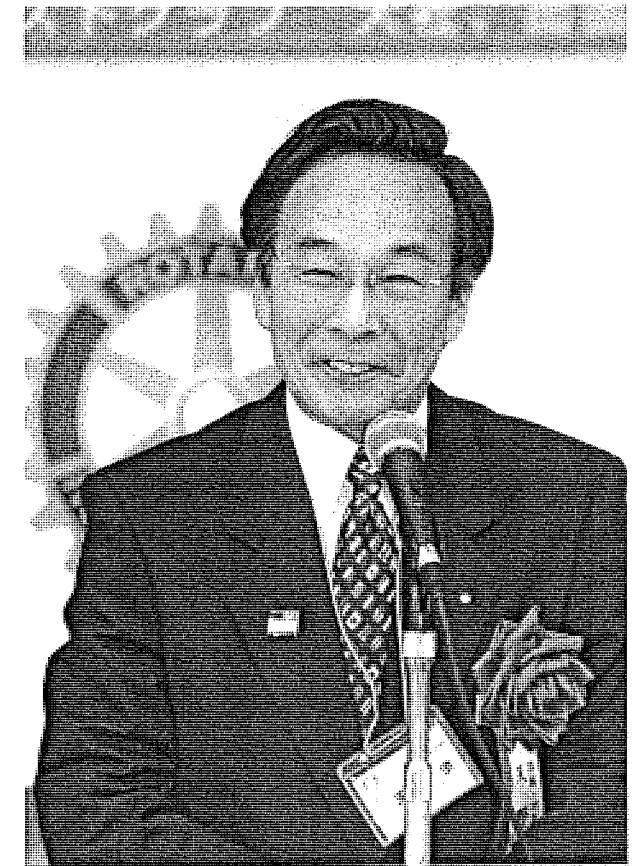
このようにチェスリー・ペリーとデビットソン大佐のことは見てみますと、ロータリーはきわめて人間くさい歴史の中で展開されてきたということと、こういう偉大なロータリアンに共通する特徴というものがあるのかなと思っております。

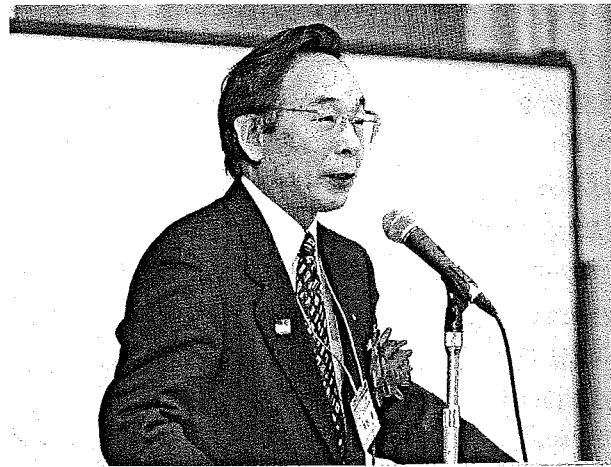
ひとつは、ロータリーが目指す目標と理想、それがそ

の人の人生の目標と理想とやはり一致している、そういう人が頑張っていますね。同時にロータリーを語る情熱を失わない、まさに原ガバナーですね。ロータリーを何度語ってもとにかく腹の底から語れる人です。それと原ガバナーも持っておられますけれども、人並みはずれた気力と行動力ですね。これがロータリーを今までここまで持ってきた人たちの行動であったと私はそのように思います。

駆け足で話をさせていただきました。未消化の部分がかかりあろうかと思いますが、最後、明日にけるロータリーということで、ロータリーが今抱える問題というものをお私なりに2点だけ考えてみました。皆さんにいろんなご批判を仰ぎたいと思っておりますが、これこそまさに独断と偏見でありますから、これからお話しすることはそのような形で理解をさせていただければありがたいと思っております。

実は私は、2004年の規定審議会の我が地区2710





地区の代表議員を務めさせていただきました。渡辺好政先生もシカゴで一緒にさせていただきました。規定審議会というのは聞きに勝る非常に体力気力の要る仕事でありました。500項目近い議案をほんの5日間で審議をしていく、本当に精神的に辛いなど、終わって本当にほっとしました。終われば涙を少し流したような感じがするほど安堵する、そうした規定審議会なんです。実はこの規定審議会でRIの長期計画に関する手続きの件というのが理事会から制定案として出されました。続いて長期計画目標の趣旨、項目を推薦する件、これが提案されました。この中を読みますと、7つの目標がRIの中にありまして、これが11月、おそらく私の想像ですが、RIの理事会で認められて、RIの長期目標になるだろうと思います。そのことに少し触れさせていただきますと、目標の中の重要なところはポリオの撲滅であります。そして先ほどから管理とかいろいろなことを申し上げておりますが、やはり今日も同じです。ロータリアンの研修をきちっとしていこう、ロータリアンの教育内容を高めるようにしていこうということが目標に掲げられております。それから、会員組織の増大、つまり会員を増強していこうということ。公共イメージの高揚。会員を増強しロータリーを強化するには、やはり一般にロータリーを知らしめる、知っていただくというのが非常に重要でありますから、これが7つの項目の中の重要なところの4つだろうというように思います。いずれにしても、採用されていくわけですが、実はこのRIの100周年に向けてロータリーは4つの目標を持っております。この目標がロータリーの広報活動の推進ということ。財団への一人当た

りの寄付100ドルの達成、これは目標ではありませんが、実は枝葉のひとつに過ぎないと思うのです。我々がその気になれば一人当たり100ドルの寄付目標は十分達成できます。ただこれは100年の目標ということにしておりますけれども、ものすごく長いスパンの目標ではないと私は思っております。それよりも会員数150万人の達成、そして4番目にあげられるポリオの撲滅、これがやはり長期目標と一致してくるわけでありまして。ということは、私見でありますけれども、ポリオの撲滅はこの100周年の最後、国際大会で撲滅の宣言はなかなか難しいのじゃないかなと考えます。これ以上の苦勞をしてもまだやらなければならないなど、そのように私は捉えております。お医者さんではないのでよく分かりませんが、渡辺好政先生のほうがはるかにそのことには知見が深いと思っております。後ほどお聞きしてみたいと思っております。それと難しいと思うのは、松本RI会長代理が触れられた150万人の達成です。

ロータリーの広報活動も、我々はまだいい加減であります。RIですら広報活動をまだきちんとしておりません。そういうことから見ますと、100周年の目標の3つはもう長期目標に入っていかなさるを得ないと思うわけでありまして。同時に、その中で一番大事なものは会員増強だと思っております。ここが今、日本のロータリーでも世界のロータリーでも一番難しいところだろうと思うわけでありまして。ですから、いろいろなことを我々は考えざるを得ないのですが、その中で今日一番、胸にとどめてお帰りいただきたいのは、会員増強をしなければロータリーは続いていかないということでありまして。我々は1年1年、歳をとります。当然のことから意欲も萎えていきます。原ガバナーのように、100歳に近くなってなおかつ、ロータリーを語れるかどうかということに、私は自信がありません。そういうことから見ますと、若い人材をロータリーは入れていかなければこのままではだめだろう、何をやるにもやはり会員組織を強化するということにあるのかなというわけでありまして。ところが残念ながら、今の状況をご覧いただくとロータリーというのは、なかなか一般の市民に理解してもらえません。と同時に、今の若い人を見ますと、ニートといわれるように働くということも拒否しますし、いろんな意味でやる気を失っていく世代が増えてきました。我々が本当にロータリーというものをみんな

に知っていただきたいと頑張る中で、人々の気持ち、価値観がだんだん変わってきている、そのように思います。

そういうところを私なりに2点取り上げて最後を締めくくりたいと思っております。この会員増強の中で今後我々が一番苦勞するかなと思うのは、我々の社会の価値観の変化というものに、これからロータリーが本当に対応できるのだろうかという問いかけであります。これは、私自身の問題でもあり、皆様方の地域でのロータリー活動の中の問題だろうと思うのです。今いろんなNPOが来ております。これはロータリーと同じような仕事をしながら、ロータリーよりもっと地域社会の中で素晴らしい活動をしていると思うのです。同時にロータリアンの方の中にもNPOに入っておられる方もいらっしゃると思っております。そういう中でロータリーがそれを上回るようなインセンティブを会員に与えることができるかどうか、そのところに今の難しさがあるかなと思うわけでありまして。説得力を持ってロータリーを若い人に伝えていく、このことを我々はちょうど100周年のこういう時期に、一番いい時期にあたっていますので、もう一度我々なりに、本当に世間が受け入れるロータリーはなんなんだということを考えなければ会員の組織の強化にはあたらぬ、出来ない、そのように私なりに思います。

それから2つめ、クラブや地区を支えるRIの組織は現状に適しているのかなという疑問を少し持っております。言い方を代えますと、クラブや地区の活動が最小の投資で最大の効果をあげる仕組みになっているかということでありまして。なぜこういうことを申し上げるかといいますと、こういう厳しい経済情勢の中で我々は専門職業人であり、実業者であり、経営者でもあります。対コスト、費用効果というものをいつも会社の経営の中で考えておられると思います。ところがロータリーだけは、自分の懐から出る金なんだ、その金が少々の後になって、「不思議なや、何でこんな出費になったんかいな」といわれるような使い方をしている本当にいいのかどうか。それを認めるRIでいいのかどうか、私はそのように思います。決してRIは認めてはいないと思うのですが、やることにひとつひとつ説明責任、アカンタビリティが出てこない、表へ出てこないという気がします。例えば、膨大な費用がかかるのが国際協議会であります。ガバナーエレクトを鍛え上げていくこと、それから国際大会も膨大な

費用がかかります。会長主催会議が4月にありますが、これもRIにとっては結構な出費であります。我々自身がガバナーやガバナーエレクト、あるいはパストガバナーが行うゾーン研究会にしても、RIはある程度の支出をせざるを得ません。こうしたガバナーやいろんな関係の会費というものがロータリーの中で占める割合というのは、約26億円なんです。皆さんがご存じない金が26億円も出費をされている。人頭分担金の65億円の中でそれが払われている。我々はここでやっぱり本当に使ったお金に効果があるのかどうかということ、今後冷静に見つめていく必要があると思っております。それはRIであり、クラブであり、我々個人個人のロータリアンで、すべての段階でそういうことを見つめ合わすということが必要なんだろうなというように思います。そういう雰囲気は少し出ておりますのは、今回の規定審議会で地区大会を1日で済ませよう、ロータリーの関係は6時間でいいと。これを守ってほしいとは思いませんが、それだけ世界のロータリアンはコストのことも意識し始めたということなのです。RI会長代理の派遣は地区の意思に任せましょう。通るかどうかは分かりません。RIが認めるかどうか分かりませんが、それからRIの役員の中で報酬を受け取るのは事務総長だけです。RIの会長エレクトやノミネーへの慰労金はもう出しません。これは制定案として採択をされました。他は決議案でありますからどうなるか分かりませんが、いずれにしてもコストに見合う効果を我々があげているかどうかということ、世界のロータリアンは考え、規定審議会の中でそれを提案をしてきています。そういった雰囲気がだんだん生まれてきています。いずれにしても我々がそうした形、ものに対してどれだけインセンティブを持ってロータリーをきちっとやっていこうという気になるかどうかということが、この100周年の節目、素晴らしいことだと思っております。

最後、まとめに入らせていただきます。

いずれにしても私もいろいろなお役をさせていただきました。2001年から2003年RIの第4ゾーンの会員増強のコーディネーター、またその間にRIの研修リーダーを経験させていただきました。そういうことの中で気付いたことが2点ありますが、いろんなクラブを伺わせていただきました。

1つは地域の閉鎖性と壁ということでありまして。今、

基調講演「ロータリー100周年に寄せて」

壁という言葉が養老さんの本で流行ってますね。地域の閉鎖性の壁というのが大きいなと思いました。

もう1つはロータリークラブの矮小化の壁ということがありました。

地域の閉鎖性の壁というのは、ロータリーの中ではみんな平等な会員であります。ところが地域社会にはやはり上下があります。会社の大小があります。それをクラブの中へ持ち込んでこれらと中々「おいお前」という形では話が出来ません。そういうところがロータリーを小さく小さく固まらせていってるといふ、もうひとつの壁を生む原因になってるなと思います。もっと大胆な発想をして、もっと大胆な改革を地域の中で我々はやるべきだろうと思います。そういうところをまとめの中で申し上げたいということがありました。

私どもは平素いろいろ偉そうなことを言っておりますけれども、ロータリアンとして他者へ奉仕する、それを実践する団体に入っているということは、我々自身がそれに働きかけていく、自ら働きかけていくということがロータリアンとして大事だろうと思うのです。今、いろいろなIEMやこうした会合の中でパネリストを呼び設定してやる中で、大抵の場合ロータリーに魅力があるかとか、ロータリーはこのままでよいか、ロータリーは21世紀末に生き残れるだろうかと言いますが、私は、これはもうインフルエンザだと思うのです。ロータリーの魅力は我々自身が作り上げるわけですから、それを語りだしたらインフルエンザにかかったと同じなんです。一気に日本全国に伝染していきます。それを語ったところでロータリーは変わらないのです。やはり我々が思っただけで行動をするということ

で変わっていくと思いますから、そこを最後になりましたが強調したいと思います。

大変偉そうな話をしてしまいましたが、私自身そんな立派なロータリアンではありません。日々悩んでおりまして、松本RI会長代理に叱咤激励されながら毎日頑張っておりますけれども、いずれにしても2690地区の皆様方が素晴らしいロータリーを構築していただいて、素晴らしい地区に発展していただくように心から祈念を申し上げ、こういう機会を与えていただきました原ガバナーに改めてまた御礼を申し上げて終わらせていただきます。つたない話をご清聴いただきましたこと、心から感謝を申し上げます。

